

中腹のオーバーハン

岩屋神社

平家穴から仰ぐ“馬鹿試し”

横倉山における最大の景勝地“馬鹿試し”は、日本最古の4億年前の石灰岩から成る、高さ約80mの目もくらむような断崖である(『不思議の森から』Vol.28)。ここは、植物学的にも歴史的にも大変見所の多い場所である。すなわち、この石灰岩の岩上から、牧野富太郎博士がヨコグラノキ、イワシデ、ヒナシャジン、ヨコグラブドウなどの『横倉山タイプ植物』を発見している。特に、「ヨコグラノキ」は牧野博士の発見・命名による29種(従来は25種)の『横倉山タイプ植物』の中で、唯一命名の基になった“基準木”が現存し、推定樹齢は約160年である(『不思議の森から』Vol.18)。年齢的なことに加えて、木材腐朽菌のサルノコシカケが寄生し、その上“キツツキ”が穴をあけるなど傷みが激しい。発見は1884(明治17)年で、命名・発表は実に14年後の1898(明治31)年である。1934(昭和9)年、博士数え73歳の時、「土佐の會」の一行約150名が横倉山で植物観察会を行った際、感慨深げに「ヨコグラノキ」を見入っていたという。同じ横倉山の『ヨコグラ』を冠した「ヨコグラブドウ」は、1918(大正7)年の発見・命名であるが、これに関しては残念ながら既に絶滅してしまった。牧野博士が採集した植物標本〔腊葉標本(東京都立大学牧野標本館寄贈)〕を横倉山自然の森博物館で見ることができる。

一方、歴史的な側面では、ここは「横倉山修験道」の三つの主な行場の内の一つで、崖の中腹に横に延びた洞窟があり、ここから法華経を写経した四国最古の「保安3(1122)年」の経筒を含む5口が見つかっている。現在ここは、安徳天皇の従臣八十数名を祭った末社の一つ「岩屋神社」となっており、江戸時代には「巖殿(御イハヤ)」と呼ばれていて、祭神は「天叢雲剣(三種の神器の一つ)」である。土佐の代表的な江戸時代の歴史書『南路志』[1805-1813]の中の「詣金峯山紀行」(曲青舎 雨洗)には、「安徳帝十束の御剣なり

と言傳ふるもの、其外種の宝器拝ミ奉るに、誠にものふりてこそ見え侍る。」とある。その他「…城戸の内・馬せめ場・鞠の場等の古名有。誠に往昔壽永の乱(壇ノ浦の戦いのこと)より、平家の人 安隠を終られしと言傳ふるも宜なるかな。」という記述もある。この岩上には安徳天皇を祭神とする「横倉宮」(古名:本宮または上ノ宮)が、さらにその北西の程近い所に「安徳天皇陵墓参考地」(宮内庁所管)がある。

ここからさらに下って、崖の真下の付け根に当る所に“平家穴”と呼ばれる小さな洞穴がある。源平の戦いに敗れてこの地に落ち延びてきた安徳天皇が、敵の襲来に備えて一時的な避難所に当たるといわれ、正面からは穴の入り口がわからないようになっている。ここからは、明治初年頃まで、刀剣・槍(矢の根のこと?)・薙刀・銅鏡等がたくさん残っていた(『越知町史』)という。『南路志』の中の「横倉山中見聞記録」では、「…宝物数多く有、多くハ脇差・長刀・矢の根(矢じり)様の物也。…夫より下へ穴(“平家穴”)有。…本宮の真下に当れり。…古銭など拾ふ所も此所也。」とあり、昔は古銭もあったことがわかり、祭祀としての場所でもあったことが推測できる。

なお、この書物の中では、石灰岩のことを“馬の骨石”と呼び、「鞠の場ハ中の宮(杉原神社)より本宮(横倉宮)に行間ニ在」という記述がある。一般には、現在の「安徳天皇陵墓参考地」のある所が、天皇が従臣たちと蹴鞠をされた場所とされていて、地元では「鞠ヶ奈呂陵墓参考地」と呼んでいるが、この記述からすれば、「鞠の場」はここではなく、杉原神社と横倉宮との中間点にあって現在「行在所跡」とされている所である可能性が高い。いずれにしても、蹴鞠に由来する「鞠の場」という字名が江戸時代にすでに存在していたということは、「安徳天皇横倉山潜幸伝説」を考える上で甚だ興味深い。



トサジョウロウホトトギス

『土佐、横倉山植物目録』

大倉 浩典

横倉山は、古くから全国的にその名が知られている山で、多くの人々によって早くから植物調査が行われたが、その割には記録が残っておらず、特に戦前のものは非常に少ない。この度、戦前の記録として3点を見つける

ることができたので順次報告する。

最初は、牧野博士と田代先生*が、大正2(1913)年9月1日に横倉山へ登った時、田代先生が記録した『横倉山植物目録』を、昭和5年1月発行の大阪植物同好会の会報第28号(1930)で、会員の原宮男氏が発表したものである(恐らく、同会は当時田代先生の指導を受けていた研究団体と思われる)。以下に本文を紹介すると、

「横倉山は牧野先生の御郷里佐川町の近くにある山でありまして、先生が最初に植物の御研究をなされた山だと聞いて居ります。又當横倉山を記念するために命名された植物に、ヨコグラノキ、ヨコグラツクバネ等があり、其の外イハシデ(イワシデ)、イハギリサウ(イワギリソウ?)、ジョウロウ

ホトトギス、コオロギラン等の珍種がありまして、可なり興味の深い山であります。

次にこの目録は大正2年に、牧野先生と田代先生のお二人にてお登りになった時に田代先生がお作りになったものでありまして、田代先生にはその前夜、町にて開かれた牧野先生歓迎会の席上、非常な悪寒と高熱(流行性感冒?)とに襲われながら興奮せる口調で一場の御挨拶を述べられ、其の夜も引き続き高熱に襲はれて安眠が出来なかったので疲労も加はり、翌朝麓の河原まで利用した乗物(馬車)の中では夢か現かわからなかった様子でありますから、尚引続き40度ばかりの高熱であったと思はれます。それにも屈せず田代先生は、力なき足を踏みしめ階段をのぼりやつの事で牧野先生に伴ふて頂上をきはめたといふことです。この目録はその時に採集されたものを記載したもので、田代先生は往時を追懐して『殆んど無茶といふべき仕方であった』と申されました。(田代先生にはこんな無茶をおやりになったことが3~4回はあったと承る)『そんな場合に造った目録であるから目がとまらず、不十分だから』とてお断りになりましたのですが、特にお願いしてこゝに掲載致します。(以上 原宮男記)

目録 (平地にあるものは大抵省く)

- こけしのぶ科 キヨスミコケシノブ、ホソバコケシノブ
- うらばし科 イテフシダ(イチョウシダ)、イヌガンソク、イハ(ワ)デンダ、オホ(オ)クジャクシダ、カラクサシダ、ククバツルデンダ、キヨタキシダ、キンマ(モ)ウワラビ、シケチシダ、シラガシダ、タニヘゴ、チャセンシダ、ツヤナシノデ、ツルデンダ、トキハ(ワ)シダ、ナチクジャク、ナラキ(イ)シダ、ヌリワラビ、ヌカボシノコギリシダ、ハコネサ(ソ)ウ、ヒメサズラン、ヒメノキシノブ、ホソバイヌワラビ、ミドリカナワラビ、ミヤマシケシダ、ヤマイヌワラビ、ワ(オ)ウレンシダ、ワラビ
- ぜんまい科 ヤマドリシダ
- はなやすり科 オホ(オ)ハナヤスリ
- いはひば科 ヒメクラマゴケ
- いちい科 カヤ
- まつ科 ツガ、イブキビャクシン
- 禾本(イネ)科 スズタケ
- かやつりぐさ科 イハ(ワ)カンスゲ
- てんなんしょう科 アラテンナンショウ、ミツバテンナンショウ、ユキモチソウ
- ゐ科 スズメノヒエ

- びやくぶ科 ナベワリ
- ゆり科 オモト、ケイビラン、ジャウラウホトトギス(ジョウロウホトトギス)、シライトサ(ソ)ウ、バイケイソウ、フクリンササユリ、ヤマジノホトトギス、ヨコグラツクバネ
- らん科 アケボノシュスラン、アオスズラン、ウテ(チョ)ウラン、エズスズラン、カモメラン、クマガイサ(ソ)ウ、クモクリサ(ソ)ウ、コホ(オ)ロギラン、サルメンエビネ、ジガバチサ(ソ)ウ、ナツエビネ、ヒナラン、ピラ(ロ)ウドラン、ヒメケイラン、ベニシュスラン、マメヅタラン、ミヤマウズラ
- かばのき科 アカシデ、アサダ、イヌシデ、ヤシャブシ、ヨグソミネバリ
- いらくさ科 サンセウサウ(サンショウソウ)、ヒメウワバミサ(ソ)ウ、ミヤマミヅ(ズ)、ヤマミヅ(ズ)
- たで科 ネバリタデ、ハナタデ、ミヤマタニソバ
- やまごぼう科 マルミノヤマゴバ(ボ)ウ
- なでしこ科 ツルハコベ
- やまぐるま科 フサザクラ
- うまのあしがた科 サバノオ、シギンカラマツ

十字(あぶらな)科 マルバコンロンサ(ソ)ウ、ミツバコンロンサ(ソ)ウ、ミヤマタネツケバナ
ゆきのした科 イハ(ワ)ガラミ、コガネネコノメサ(ソ)ウ、ゴトウヅル、ヒメウツギ、ネコノメサ(ソ)の一種
ばら科 イヌザクラ、イハ(ワ)キンバイ、イブキシモツケ、ウラジロノキ、コバノフユイチゴ、マルバイチゴ
まめ科 フジキ
ふうろさ(そ)う科 コフウロウキ
かたばみ科 コミヤマカタバミ、ミヤマカタバミ
たかとうだい科 シラキ
もちのき科 イヌツゲ、クロソヨゴ、ソヨゴ
かえで科 ウリカエデ、ウリハダカエデ、エンコウカエデ、コハウチハ(ワ)カエデ
くろうめもどき科 ヨコグラノキ
ぶどう科 ケサンカクヅル
さるなし科 マタタビ
つばき科 ヒメシャラ
すみれ科 コミヤマスマミレ、ナガバスマミレサイシン、ヒメミヤマスマミレ、フモトスマミレ
じんちゃ(よ)うげ科 ミヤマガンピ
うりのき科 ウリノキ
あかばな科 ミヤマタニタデ
うこぎ科 ウド、コシアブラ、トチバニンジン

繖形(せり)科 イヌタ(ト)ウキ、シラカハ(ワ)バ(ボ)ウフウ、ハナビゼリ
いちやくさ(そ)う科 ウメガサソウ
しゃくなげ科 サラサドウダン、モチツツジ、ヤマツツジ
さくらさ(そ)う科 モロコシサ(ソ)ウ
はいのき科 サハ(ワ)フタギ、ハインキ
ひひ(い)らぎ科 ミヤマイボタ
まちな科 ホウライカヅラ
りんどう科 アサマリンド(ド)ウ
唇形(しそ)科 シモバシラ、ズカ(コ)ウジュ、ヤマタツナミサ(ソ)ウ、ヤマジワ(オ)ウ
なす科 マルバノホロシ
ごまのはぐさ科 ミヤマママコナ
いは(わ)たばこ科 イハ(ワ)ギリサ(ソ)ウ
きつねのごま科 スズムシサ(ソ)ウ
あかね科 イナモリサ(ソ)ウ、クルマムグラ、ミヤマムグラ、ヤマムグラ
ききや(よ)う科 サイコフシャジン(ヒナシャジン?)、ヒナギキヤ(ヨ)ウ
すひ(い)かつら科 イハ(ワ)ツクバネウツギ、ウスバヘ(ヒョ)ウタンボク、コツクバネウツギ、ミヤマウグヒ(イ)スカグラ、ミヤマシグレ
きく科 イナカギク、クサノワ(オ)ウバノギク、タイミンガサ、モミジガサ、ハナヤクシサ(ソ)ウ、ヤハズハハコ

文中の「田代先生」とは田代善太郎(明治5年、福島県生まれ)のことで、福島師範学校を卒業後東京の高等師範学校に学び、長崎県立高等女学校に教頭として赴任。教育の傍ら明治30年頃から、10歳年上の牧野富太郎に直接指導を受けつつ九州の植物分布の調査に熱中し、植物研究や同志の育成に力を注ぐ。明治39年8月には、牧野博士を東京から長崎へ講師として招き、第1回夏期植物講習会を開始、同時に九州各地の植物同好会を指導しながら明治44年まで九州各地で6回牧野博士を講師に迎え夏期講習会を実施。これにより九州各地の植物研究が飛躍的に発展した。

田代先生は、生前自分の毎日の行動を日記の形で克明に記録しており、先生の死後次男がその日記を明治・大正・昭和編にまとめ『田代善太郎日記』として出版、その大正編の大正2年9月1日の日記に今回の横倉山登山の様子が記されている。その前後を紹介すると、

九州での夏期植物講習会は一応6回で終わりとし、第7回は広島・松山・高知で行うこととし、大正2年8月10日に牧野博士と広島で合流、講演会を実施、午後は周辺の植物採集。

8月11日：尾道から高浜に渡り松山で講習会。

8月12日：高浜から宇和島を経て8月13日高知県宿毛に上陸、人力車で中村に到着。山本一氏〔ヤッコソウの発見者で、当時県立第4中学

校(現中村高校)教員で田代先生の弟子の一人)達の出迎えを受ける。

8月14日～20日：講演会や講習会、幡多方面の植物採集会を行う。

8月21日：午前中それまでの採集品の荷造り発送、午後山本一氏も同行し上川口より乗船高知に向かう。

8月22日：高知港着、吉永虎馬氏〔明治4年佐川に生まれ、幼少の頃より牧野博士とともに山を歩き、キレンゲショウマ(17歳時)、コオロギラン(18歳時)の発見者。師範学校卒業後も高知に残り、小学校・中学校・高等女学校などの教員をしながら植物の研究と後輩の指導育成に努める。田代先生とは明治30年頃から絶えず手紙のやりとりで植物に関する情報交換をしていたが、実際に顔を合わすのはこの日が初めてだったといわれている。〕等の出迎えを受け城西館に投宿後講演会。

8月23日：ごめん講習会。夜は吉永氏・山本氏も集まり今後の高知県博物学会の運営等につき夜半まで話し合う。



コオロギラン

- 8月24日～28日：国分寺・岡豊城跡・十市・白木谷・長浜・宇佐方面で植物採集会。
- 8月29日：午前7時山本 一氏中村に出発するのを見送り、大津村で植物採集。織田千齡氏横倉山案内を報ぜられる。〔註〕田代先生とは織田氏が愛媛県立八幡浜商業学校に勤務中、愛媛博物会の会員として田代先生の指導を受けられ面識があったものと思われ、また八幡浜商業学校 の原稿用紙に書かれた問題の「横倉山植物分布地図」は恐らくこの時織田氏が田代先生に送られた資料ではないかと考えられる。
- 8月30日（土）晴：牧野先生、吉永氏と3人での能津の錦山に赴きダウダンツツジ（ドウダンツツジ）発見、付近で植物採集。
- 8月31日（日）雨：夜来、感冒の気味あり。牧野先生と吉永氏の3人で伊野まで電車。それより車を連ねて佐川に至る。霧生関まで町の故旧・有志を挙って歓迎す。雨少しく至る。佐川に入り川田文庫にて休憩。午後3時すぎ、尋常小学校にて先生久し振りのお国入に対する歓迎式、先生の演説中も高熱ためふるえがきて困る。夜、川田文庫にて歓迎宴会。一席の演説をなす。頭痛はげしくて困る。
- 9月1日（月）晴：牧野先生と車にて名教館とその他をまはり越知町にて昼食。仁淀川の川原を見、楠神より横倉山（1010m）にのぼる。車夫を伴ひたれば身軽なるも、体の工合あしければ、

先生に伴ふこと難かりき。住太たき（住吉滝＝住吉）にて日暮る。付近および穀池（空池）あたりを見ること能はず。石段のところ真暗にて難儀なり。下山して越知にて夕食。佐川に帰るとは11時すぎなり。

- 9月2日（火）晴：高知にかへる。
- 9月3日（水）晴：五台山にのぼり、海南学校・第一中学校・高等女学校訪問。
- 9月4日（木）晴：午前中荷物を送る。午後1吉永氏等の見送りを受け志賀丸にて神戸に向う。これで第7回植物夏期講習会を全て終了。

以上のように、田代先生は中央の偉い先生方も積極的に地方に出掛け、地方の研究者との交流を深めることが大切だとの考えで、明治39年から毎年のように九州を始め西日本各地で牧野先生を講師とする植物講習会を計画実行した人物です。

尚、大阪植物同好会でこの目録を発表した原宮男氏は、桃谷化粧品会社の関係者で山口県出身、田代氏に晩年まで熱心に師事、家族ぐるみの親しい交際を続けている。大正14年には田代氏の研究応援のため、氏が蒐集した標本2万5千点を桃谷化粧品会社で買い上げ、大正10年に開講した京都帝国大学理学部植物学教室に寄付、同時に田代氏も同大学理学部嘱託として植物学教室の標本整理・拡充に当ることになった。

（おおくら こうすけ／植物研究家）



植物学者・織田千齡のメモ

安井 敏夫

越知町出身の植物研究家で、『横倉山タイプ植物』の一つである「ヨコグラツクバネ」の発見者（命名・発表は牧野富太郎,1912）として知られる人物が織田千齡である。明治4（1871）年に越知町楠神に生まれ、地元越知町や佐川町の他八幡浜商業学校の教員を務め、植物の宝庫・横倉山にも生徒を連れて度々登り、理科教育にも熱心であった。最近になってその千齡の貴重な自筆メモが見つかった。

メモは、高知県出身の植物研究家で教育者でもあった故大倉幸也氏*の遺品で、佐川町出身の同

時期の植物学者・吉永虎馬が生前交流のあった京都大学の田代善太郎氏（嘱託）関係の資料の中から見つかったといい、「原稿用紙 愛媛県立八幡浜商業学校」の文字の入った赤い方眼紙に書かれている。横倉山東麓の文徳集落からと杉原神社旧表参道である楠神集落（織田千齡の生家）から杉原神社、安徳天皇陵墓参考地、空池を経て住吉に至るルート沿いで見られる主な植物が、原稿用紙一面に細く丁寧な筆で記されている [写真]。杉原神社を中心に全域のルートがうまく収まっていて、



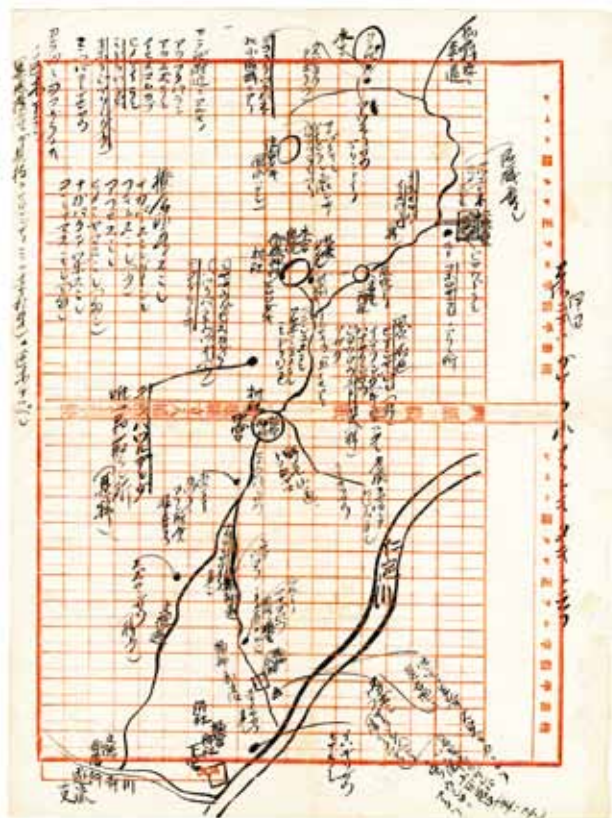
また、「ヨコグラノキ」については『巨木アラン暴風後小生ガ其枝ヲヒロヒシ者□□本邦オノ巨木ナルベシ』とある。他に、クマガイソウと対照的な「アツモリソウ」の名が記されているが、現在は見られない。あと、『カラ池附近ニアルモノ』として「ミドリワラビ」が挙げられているが、本種は横倉山ではすでに絶滅している。

②杉原神社から少し行った所の山道の南で「キクバツルデンダ」が見つかったことで、『唯一ヶ所取リシ所（甚稀）』とある。場所的には、かつて安徳天皇の従臣の屋敷が25軒あったといわれる「天の高市（別府の都）」（現在山小屋のある所）の南の崖下なのかもしれない。ここは、昭和30年頃まで参拝客のための茶店のあった所で、現在は植林地であるが、その当時は原生林内であったと思われる。

ここで、織田千齡とヨコグラノキに関する面白いエピソードがある。それは、明治41（1908）年、千齡が38歳頃、旧制高等小学校（越知尋常高等小学校？）の生徒二人を連れて横倉山へ植物採集に行った時のことである。馬鹿試しの岩上に建つ横倉宮（安徳天皇祭神）脇にある「ヨコグラノキ」[写真]（牧野博士発見・命名の基準木；推定樹齢160年）その他を案内する中で、「空池」（石灰岩の小規模なドリーネ地形）で、たまたま根本（根周り？）が一丈（約1.2～1.5メートル）もある「ヨコグラノキ」の親木と思われる大木を見つけ、『ここに親木があって、この実を鳥が食い、あの崖上（馬鹿試しのこと）で糞をして、あの木が生えたんだな』とユーモアを交えて言ったという（『越知よもやま話』愛郷社、1976）。70年以上も経って、当時の生徒の一人が書いた回顧録（上述）の中で、千齡が越知町出身の数少ない学者の一人として推賞すべき人物ではないだろうか、と述べている。



千齡は、植物分類学に興味を持ち、横倉山を始めその付近の植物を調査したが、その過程で横倉山で「ヨコグラツクバネ」（ユリ科・『横倉山タイプ植物』）を発見している。本種は、牧野富太郎によって、大正1（1912）年に新種として命名発表され、絶滅危惧種ではあるが、現在でも僅かな



植物名も整然と並べられていることから、現地を歩きながら書いたものではなく、後にまとめて清書したものと推測されていた。本資料の提供者である大倉浩典氏（幸也氏の御子息）のその後の調査で、田代善太郎氏が計画実行した、牧野富太郎博士を講師とする植物講習会〔大正2（1913）年〕の資料として、横倉山の案内役に任命された織田千齡が田代氏に送ったものであることが判明した。これは、『横倉山植物分布図』というべきもので、記録として残るまとまったものとしては最も古い100年以上前のものということになる。

本メモに記述されている表現の中で注目すべき点は、

①コオロギランとヨコグラツクバネの基準産地が記されていること。

「コオロギラン」

安徳天皇陵墓参考地の石段右側（東）に『モトコホロギランノアリシ所』（元コオロギランがあった所）とある。

これまでの通説では、明治23（1890）年9月に、牧野富太郎博士・吉永虎馬・矢野勢吉郎（海南学校教諭）の三人が昼食をとって石段の反対側で虎馬が最初に見つけたと言われてきていたので、少し異なっている。ちなみに、現在そこにはコオロギランは見られず、石段西側の原生林内の杉の落ち葉間にわずかに自生している。

「ヨコグラツクバネ」

空池（東入口付近）に現在でもわずかに見られ[写真]、メモには『此小区域ニアリ』とある。

がら自生している。今回見つかった千齡のメモは、千齡が文部省検定試験の中等教育植物科に合格して愛媛県の八幡浜商業学校に赴任した際の学校の原稿用紙に書いたものと思われる。その後、再び小学校の教師となったが、仕事の傍ら牧野博士の指導の下でさらに研究に没頭することになる。

また、千齡は牧野博士の協力者でもあり、牧野博士が明治38（1905）年5月に千齡宛てに出した手紙には、横倉山の「ヒナラン」（ラン科：別名「ヒメイワラン」）を採って送って欲しいといった内容のことが記されている。この時、牧野博士43歳、千齡は地元越知尋常高等小学校の正教員になった34歳である。牧野博士がヒナランを採集した場所は、横倉山北斜面の本道（現在の車道の前身？）と杉原神社旧表参道合流点の手前の崖で、小祠（現在の八坂神社？）の手前に当る。5年前の2009年に、

南国市の植物愛好家によってヒナランが何十年ぶりに確認されたが（『博物館ニュース Vol.21』）、この場所も牧野博士が採集した場所と近く、あるいは同一場所なのかもしれない。

千齡は、ヨコグラツクバネが新種として学会に発表されて植物研究者として認められ、上京して早稲田実業学校の教員のかたわら研究に打ち込んでいたが、発病して郷里に帰り、大正8（1919）年1月7日没。49歳の若さだった。

織田千齡以降、地元越知町からは未だ植物学者は育っておらず、近い将来、全国的に名の知れた植物の宝庫・横倉山の植物に造詣の深い人物が現れることを願いたいものである。

※牧野富太郎に指導を受け、県内の植物を採集・研究し、高知県の理科教育の発展に尽くす。昭和天皇が高知県に行幸された際には、室戸・足摺の植物の説明役を二度にわたり努めた。

（やすい としお／横倉山自然の森博物館学芸員）

博物館行事

企画展：『化石水族館－友永たろ・魚イラストの世界－』
2014年1月29日（水）～3月9日（日）



イラストレーター・友永たろが、魚類が登場する約5億年前の古生代カンブリア紀から恐類が絶滅する中生代白亜紀に化石として見つかった魚類（“化石魚類”）をシーラカンスで代表される“生きた化石”とともに当時の環境とともにその姿をリアルかつ可愛らしく描いたイラストと石粉粘土で作った立体作品98点を展示。

期間中2回、「自分だけのおさかな缶バッジ」を作るワークショップも開催。

作品を通して、何億年～何千万年前の長い魚類の進化の中で誕生したまだ誰も見たことのない魚類の棲む海の世界へと誘い、進化の歴史の一場面を水族館の感覚で見てもらえればと思う。

《主な展示品》

- ユーステノプテロン（最初に陸上に上がった魚類で、両生類に進化していく）[写真右]
- 甲冑魚（武士の甲冑のような硬い皮膚で体が覆われた初期の魚類）[写真左]



など
主な感想はとして、「素晴らしい想像力とユーモアたっぷりのお魚。魚のことが好きになりました」「おもしろい形をした魚が昔はたくさんいたんだなあと思いました」「イラストがきれいでかわいいです。古代にこんな魚がいたん

だと思うとロマンを感じました」「魚たちの表情、色がとてもあたたかくてすばらしいですね」「絵がすごくかわいかったです。絵の色があざやかでした」「化石しかなかったからわからない部分が多いのにここまで完成されたイラストやファイギアになっていてすごいと思いました」などがあつた。

企画展：『おもしろ鉄道資料展』

2014年3月29日（土）～5月11日（日）

旧国鉄時代の車両の部品（行先標・SLナンバープレートなど）、切符、鉄道地図、時刻表、駅弁包み紙、写真、模型などの鉄道関係資料を展示。大人から子供まで、世代を超えていろんな人たちに観て楽しんでもらい、そして懐かしんで戴きたいという思いで開催する。

明治5（1872）年に新橋―横浜間に鉄道が開通してから1世紀以上の142年の歴史を有する日本の鉄道であるが、昭和39（1964）年の東京オリンピックに合わせて開通した新幹線は、日本が世界に誇れる鉄道技術であった。その後の時代の波で、国鉄からJRに代わり、力強いSLが徐々に姿を消し、青函連絡船や宇高連絡船が廃止となり、代わって全国に新幹線網が伸び、車両・移動形態が大きく様変わりした。

このような鉄道の変換期に生きた人々には、懐かしい思い出が詰まっていることであろう。少しでも多くの人々に懐かしい思い出に浸ってもらうことができたのではないだろうか。



「懐かしい国鉄時代のことを思い出しました」「昔の切符や行先板などいっぱいあって見れたので嬉しいです。また来たいです。電車に乗りたくなりました」「昔を思い出します。懐かしい気持ちです」「資料も良かったですが、BGMの駅員さんの声が懐かしく、昔を思い出しました」「貴重な資料が多いです。是非大切に保管いただきたい」「自分も展示の機会があったが、これほどのことはできなかった。すばらしい」などの感想があった。

第36回写真家協会展：『土佐』選抜移動展

2014年5月24日(土)～6月8日(日)

土佐の伝統的な祭りやイベント、風俗・風土などを記録として後世に残す目的の展示会で、今回は89点の力作が選抜・出品された。

夏休み博物館教室〔工作〕(小・中学生対象)

2014年8月10日(日)

〔参加者：午前の部 11名、午後の部 11名〕

恒例の「オリジナル万華鏡」と、余った時間で、CDと風船を使った「風船ホバークラフト」を作る。万華鏡はいつもながら、きれいで夢のあるものがいろいろできて楽しいものである。



「思ったより難しかったけど、優しくていねいに教えてくれたので、きれいに完成しました」「今まで私の見たことのない万華鏡を自分で作れたのがとてもうれしいです」などの感想があった。



友の会だより

「土佐の投げ入れ堂」聖神社とアケボノツツジ観察会

2014年4月5日(土)〔参加者：12名(内事務局2名)〕



標高1,000m以内でのアケボノツツジの群生地としては珍しい越知町小日浦。昨年古木から成る群生地への観察道が「聖の里小日浦保存会」のメンバーによって整備され、案内してもらった。昨年18日にはすでにピークを過ぎて丁度の時期に観察できなかったのが、今年は一週間時期を早めたが、今度はまだ蕾の状態だった。植物の見頃の時期に出くわすのはなかなか難しいものである。また、来年を期待したい。



ピーク時

っていたが、白いスズランのような花をたくさん付けるドウダンツツジがまだあちこちに見られ、目を楽しませてくれた。この他、錦山特有のニシキアカマツ、ニシキコバノミツバツツジ、シュンジュギク、シライトソウ、カザグルマなど横倉山にはない植物が見られた。

「仁淀川水質調べ」(身近な水環境全国一斉調査)

2014年6月1日(日)〔参加者：6名(内事務局2名)〕

①仁淀川本流、②坂折川(仁淀川支流)、③梅ノ木川(同)の3ヶ所で、COD(化学的酸素要求量)を測定。①②は「非常にきれい」であるが、市街地内を流れる③は、以前から比べると環境は随分と良くなったが、水質の方はまだ「汚い」に属している。



「日高村錦山公園植物観察会

ートサミズキ・ドウダンツツジー

2014年4月27日(日)

〔解説：川瀬卿宥氏(日高村)、

参加者：17名(内事務局2名)〕

トサミズキ、ドウダンツツジの群生地

として有名な日高村錦山公園。蛇紋岩地帯で、日本の蛇紋岩地植物研究の発端の地であり、コオロギランの第一発見



者である吉永虎馬が、大正2(1913)年に採集したものが牧野富太郎によって「ドウダンツツジ」と確認される。国内における初の唯一の自生地として知られる。この時期、トサミズキは既に花が終わ

「杉原神社のヒメボタル観察会」

2014年6月26日(木)〔参加者：30余名(内事務局4名)〕

平成10年から始まった恒例の「ヒメボタル観察会」。6年前に発光キノコ「シイノトモシビタケ」が見つかり、以後はそれと併せて行うようになった。今年は、時折小雨の舞う梅雨時期の曇天下での観察会となったが、幸い傘をささずに無事観察会を終えることができた。ヒメボタルは今年も数は少なかったが、やはり深山で観るホタルの光は神秘的である。一方、シイノトモシビタケは昨年異常に多く発生し大勢の人で賑わったが、今年は極端に少なかった。しかしながら、暗闇にほのかに青白く光る明かりは神秘的で、中には傘の直径が1.5^号ほどのものがあり、遠くからでも一際大きなぼんやりとした明かりが目につくほどである。今回は別の新たな小さな倒木にシイノトモシビタケが着生しているのが見つかったことと、シイノトモシビタケよりは格段小さく、日本に八丈島と横倉山にしかないという極めて珍しい発光キノコ「ギンガタケ」が密生している立木が見つかったことが明るいニュースであった。

横倉山ミニ歳時記

■危うし！ 自生数減った「ヨコグラツクバネ」

『横倉山タイプ植物』の一つで、絶滅危惧種であるユリ科の植物「ヨコグラツクバネ」。

これまで、横倉山における身近な主な自生地として、畝傍山眺望所入口と空池・住吉分岐点の間の遊歩道沿いに、直径1mほどの小群生地があった[写真]が、10年前の2004年8月の台風の強風で、近くの杉が倒れ、ほぼそこを直撃する形になった。その所為で微妙に環境が変わったのか、それ以降は急激に個体数が減り、現在ではほんの数個体しか見られなくなってしまった。

その名の由来は、葉が正月の羽子板遊び(羽根突き)の「羽根」に似ているため“衝羽根”、横倉山で最初に発見されたことから「横倉衝羽根」による。葉は通常4枚が主であるが、中に3枚、稀に5枚になるものもある。茎頂に5月上旬に緑色の花を、秋には黒紫色の球形の実を付け、羽根の先端の球(無患子の種子)に似る。



花柄(花柱)がほとんどなく、葉と花被(萼)がくっついており、2以上ある「ツクバネソウ」とは変種(亜種)として区別されるが、同じ場所でも個体によっては中間型のものもあるようである。

学名: *Paris tetraphylla* A.Gray f. *sessiliflora* (Makino) H.Haraで、種名の *sessile* は「無柄の」を意味する。県下では、横倉山を基準産地とし、旧吾川村・大豊町・旧仁淀村(烏形山)など中央北部でわずかに見られる。四国では剣山に分布する。

この10月7日に、博物館の方で上記倒木を除去した。再び元の姿に戻ることを祈りたい。



資料寄贈御礼

昆虫(蝶)標本の『大津 修 コレクション』が、4月17日当館に寄贈されました。

故・大津 修氏(高知市横浜新町)が蒐集された蝶のコレクション(ドイツ箱:56箱)で、標本の中には、オオムラサキ(国蝶)、ミドリシジミなど、県内外の貴重なものもあります。御遺族の方のご好意に深く感謝し、当館に末永く收藏し、供覧させていただきたいと思えます。

おくやみと御礼

博物館友の会・フォレストクラブの会員で、長い間同会の「炭焼き体験」を、窯造りから炭飾りまでご指導いただいた斎藤富明さん(越知町)が、去る7月11日御病気のためお亡くなりになりました。享年84歳。本当に長い間お世話になりました。心からご冥福をお祈り致します。

【博物館日誌(抄)・平成26年度博物館行事予定】

- 2014年1月29日(水)～3月9日(日)
企画展:『化石水族館-友永たろ・魚イラストの世界-』
- 3月29日(土)～5月11日(日)
企画展:『おもしろ鉄道資料展』
- 5月24日(土)～6月8日(日)
第36回 写真展「土佐」
- 5月26日(月)～29日(木)
越知中学校職業体験
- 8月2日(土)～10月19日(日)
企画展:『ヒトと野生動物との共生
-鳥獣被害から田畑を守る-』
- 8月10日(日)
夏休み博物館教室〔工作〕(午前・午後)

- 11月～12月
企画展:『写真でみる闇の光-不思議の森横倉山から-』(仮称)
- 2015年2月11日(水・祝)～3月29日(日)
企画展:『にしみね みく染色展-布が咲く-』

【博物館友の会「フォレストクラブ」平成25年度活動予定】

- 4月6日(日) “土佐の投入堂” 聖神社とアケボノツツジ観察会
- 4月27日(日) 日高村錦山公園植物観察会
-トサミズキ・ドウダンツツジ-
- 5月24日(土) 友の会総会
- 6月1日(日) 仁淀川水質調べ
- 6月22日(日) 横倉山のヒメボタルと発光キノコ観察会
- 11月15日(土)・16日(日)〔一泊二日〕
“天空の城”竹田城跡、投入堂を訪ねて

高知県越知町立
横倉山
自然の森博物館



- 開館時間: 午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日: 毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料: 大人……………500円 (※各20名以上の団体は100円引き)
高校・大学生……………400円
小・中学生……………200円
- 越知への交通
高知 — JR特急 約30分 — 佐川 — バス 約15分 — 越知
 JR普通 約50分



〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
<http://www.town.ochi.kochi.jp/>